『西南アジア研究』No. 55, 2001

シリア，テシュリーン・ダム水没地域の半遊牧部族民
―― シリアの歴史的理解の一助として ――

山　崎　やよい

は　じ　め　に

シリアでは，1980年代，先のユーフラテス川上流のタブカ・ダムに続き，そのさらに上流のマサウディーエ地区に，テシュリーン・ダムを建設することが決定した。このため，ダムのすぐ北に位置するテル・キタールから，シリア，トルコ国境の町ジェラブルスの南まで約50 KMの範囲に存在する村落，遺跡が水没することになった。遺跡としては，著名なティル・バルシップ（テル・アフマル）をはじめ，新石器時代からイスラム期までの数多くの遺跡がすでに分布調査[1)]により確認されており，シリア考古総局は，タブカ・ダムの場合と同じく各国隊に要請して水没予定遺跡の事前緊急調査を行った。これらの考古学的調査の結果に関しては，概報，本報告が次々と発表されつつある。

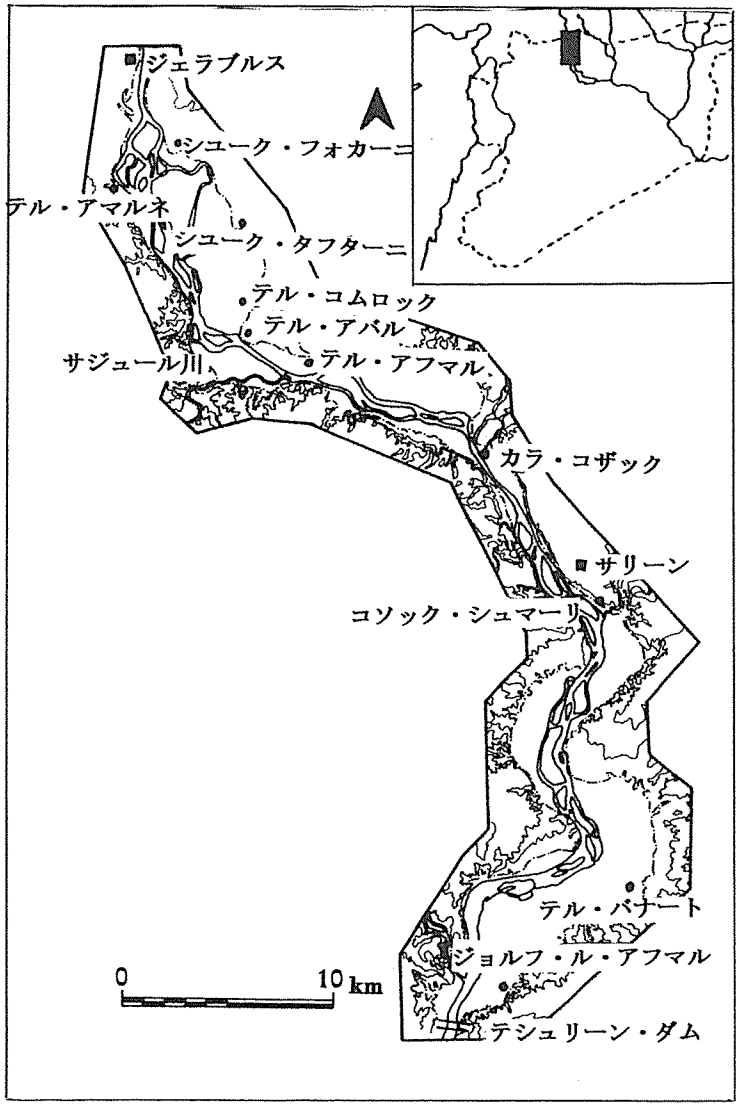
筆者は1989年から1993年にかけて，シリア隊の担当するテル・アバルとテル・コムロックの二つの遺跡の調査に参加したが，発掘調査の合間をぬい，水没地域の民族学的調査も行った。先のタブカ・ダム・プロジェクトの際には，多くの考古学的成果が記録保存されたが，この点に関してはほとんど留意されず，かの地域の民族学的資料がまとまった形で保存できなかった。今回の調査はこの反省の上に立ち，主眼を諸村の略史や，構成部族とその動きの諸相の把握におき，複数の人物とのいわゆるマダーフェ[2)]的な雰囲気の中での情報収集を試みた。対談は当時アレッポ国立博物館の主任研究員のハミード・ハンマーデ氏が担当したが，常にテーマを決めていたわけではなく，対談に応じた人々も任意であり，情報の密度や傾向にばらつきが出た事は否めない。

従って今回の調査により，決して完璧に当初の目的が果たせたわけではないかもしれない。しかし，歴史的事象の有機的な理解のための一つの試みとして，部族社会の把握は意義ある事と考え，断片的な情報ではあるが，歴史の流れの中にそれらを組み込んでみることにした。

シリアでは，人々がそれぞれのアイデンティティーを語るとき，出自を重要視し，都市民

1）Sanlaville, Pの他，前シカゴ大学オリエント研究所のMcClellan, T.による調査。

2）客人もてなす応接間の意で，社交サロン的な機能を果たす。語られる話題は様々で，人々はここで情報交換を行う。



● 村落
■ 町
—·— (一点破線) 水没境界

図1　テシュリーン地域の集落

でさえ，出身部族を云々と言う事がままある。都市部では，現在，部族に言い及ぶのは，広く町に散らばる同族をなんらかの目的（例えば選挙の票集めの際）でまとめたい場合などに限られるが，村落部では，いまだに村自体が部族社会である事が多い。また，都市部，村落部にかかわらず，部族が政治的な集合の単位となることもある。現在ではそれほど問題にならなくなって来てはいるものの，婚姻の際も，同族内での結婚がより推奨される事実はある。近代化が急ピッチで推し進められる中でも，伝統的な部族の意識はそこここで確認されるのである。

タブカ，テシュリーン両ダム建設に伴い，ユーフラテス川流域の部族とその村落は解体を余儀なくされた。水没した村の住民は，代替地に元の部族もしくは氏族単位で移り住むこともあるが，これを機会に町に出て行くなど，離散してしまうことも多く，部族社会に今までとは異質の変化が訪れつつあるのは確かである。彼らの今後に関しては予断を許さないが，以下に半遊牧部族民のユーフラテス川沿いへの定着の過程，その後の小史を追いながら，シリアの歴史の中での半遊牧部族及び遊牧部族の位置を再考してみたい。

I　遊牧部族民，半遊牧部族民

ユーフラテス川流域の村落の歴史的様相を追っていく上で，各村落を構成する部族の性格，出自は極めて決定的な要素になる。今回対象とした19世紀以降定住したこれら部族は基本的に遊牧部族であり，その詳細に関してはNorman N. Lewisの*Nomads and settlers in Syria and Jordan*, 1800－1980の中に触れられている。ただ，ここで一口に遊牧あるいは遊牧民と言ってもその実態は非常に多様であり，民族的，歴史的には勿論，その遊牧形態も様々である。アラブ遊牧部族民といわゆるベドウィン（バドゥ）に関してNormanは，「アラブの部族民は普通彼ら自身，また他者からもアラブと呼ばれるが，この呼称は彼らが農民出身ではなく，またクルドでもトルクマンでもないことを示している。アラブの広いカテゴリーの中で，極めて限られた部族のみが特別にベドウィンと呼ばれ，彼らはその‘高貴’な出自を意識する。殆ど全てがラクダ飼養民で広範囲を移動し，1年のうちの大半をバーディェ[3)]で過ごす。他のアラブ部族は本来的にヒツジ飼養民であり，ラクダが幾頭かいる場合はテントやその他の荷物の運搬用である。」［Norman 1987：3］とし，時に混同されがちな両者の違いを明記している。この両者のアイデンティティーの相違は，単に彼ら部族民間の縦割りの区別を確認するためだけではなく，歴史的に遊牧民もしくは遊牧形態がどのように変化してきたかを辿る上で極めて重要な意味を持つと考えられるが，そのためにはさらに，「天水農耕地やユーフラテス川およびその支流の灌漑がなされている土地で農耕を行う移動牧畜民や，遊牧民をルーツとする農民」［Norman 1989：3］の存在も含めての考察が必要となる。

この「移動牧畜民」は，半遊牧民と言い換える事ができるが，彼らは本拠となる土地，農耕地を持ち，放牧の必要な家畜を春・夏期にはその本拠の近くで飼養し，冬期には草を求めてかなり遠方の放牧地へ出かけるのである。その際にはいくつかの放牧地を廻り，キャンプをはるわけであるが，この冬期の移動の距離は，ヒツジやヤギがおもな飼養家畜であること

3）砂漠，特にここではステップを意味する。「ベドウィン」はバーディヤに住む人の意のアラビア語，バダウィから来ている。

から必然的に限られる。半遊牧形態をとる民族としてはアラブの他，少数ではあるがクルドとトルクマンがある。クルドとトルクマンはシリアでも最北部に存在し，アラブの半遊牧民と密接な関係を持ちながらも彼ら固有の動きを呈示してきた。

遊牧民，半遊牧民はそれぞれの移動範囲，テリトリー，伝統，気質等々により，時の勢力に吸収あるいは利用されることもあったが，独自の一大勢力を形成することもままあり，常に無視の出来ない集団として存在してきた。今回対象とするユーフラテス川上流域の事象は，このことを証明するための一例に過ぎないとは言え，歴史と有機的に関わりあってきたこの大河とその流域における具体的事例と言う点で，他地域とは異なる意味を持つことを強調したい。

II 半遊牧民の定住化

上記に遊牧民，半遊牧民両者の概要を述べたが，半遊牧民のうちユーフラテス川流域へ定住した部族について，その定住の背景の他，これが如何になされ，その後の彼らの生活がどのように繰り広げられたかをここで追ってみたい。

1 半遊牧民の定住化の背景

ここで問題とする半遊牧民の定住化はオスマン・トルコ末期，19世紀の後半から始まるが，それ以前のシリア領域内のユーフラテス川上流域は，13世紀のモンゴルの来襲以降，定住民のいない空白地帯であった。その後，何人かのヨーロッパ人がこの地を訪れているが，例えば，イギリス人，ヘンリー・メンドラル Henry Mendral は“Trip from Aleppo to Urshelim”と言う紀行文の中でユーフラテス川上流域には集落を見ずと記しているし，チェズニー大佐による1831年のこの地の踏査に関する記録にも，集落のなかったことが記述されている[4]。この地域がようやく人の関心を引くようになるのは19世紀後半，ドイツの3B政策にからんで，ジェラブルスに町が作られ，鉄道の駅が設置されるようになってからである。その後，考古学的な関心もこれに加わり，大英博物館のジョージ・スミスがカルケミシュの発掘に着手した。ホガース，ウーリー，そしていわゆるアラビアのロレンス，T.E.ロレンス等がこの調査を引き継ぐにあたり，再びこの地が世界の脚光を浴びるようになる。

この多分に政治的な動きと時を同じくして，周辺の半遊牧民にも動きが見られる。ユーフラテス川に沿った地域を拠点とする半遊牧民は，その歴史を通じ，常にこの大河を仲介としての活動を展開してきたわけであるが，この時期にやはり一つの特徴的な動きを見せる。イラク南部に存在していたブ・シャーバーン族の北への移動である。この半遊牧部族は，いく

4） Ayyash（1989）の記述より。

つかの支族に分かれ，ユーフラテス川上流域に定着，ラッカ，メスケネ，メンベジ，またあるものはアレッポ周辺に定住村落を形成した。このブ・シャーバーン族の動きは，極めて自然発生的なものであったようで，元々の土地における人口の増加に伴う土地の不足などから必要にせまられて新天地への移動が促されたものと思われる。従って次に述べるような，政治的要因に拠る移動とは事情を異にしている。

19世紀はアラビアの諸地域でベドウィンの動きが目立つようになるが，特にワッハーブ派によるイスラム改革運動の後，さらにこれが顕著になる。この改革運動はベドウィンにこれを強要することで，かえってかれらの反発を招き，いわゆるビラード・シャム[5]北部地域での遊牧民部族間の闘争を深刻化させた。すなわち，最有力部族の一つであるアネザ族が，バーディヤト・シャーム[6]の西辺に存在していたいくつかの部族を北へと追い上げたわけである。このため，タイ族，シャンマル族ジェイス族は北部ジャズィーラ[7]へ，タイ族，シャンマル族はユーフラテス川支流のカブール川流域，ジェイス族はバリーフ川流域の肥沃な土地へとそれぞれ移動し，各々の地で定着農民となった。

また，別の移動の波は，北，すなわちトルコ南部より押し寄せてきた。この波の中心となったのは，クルドの各部族で，バラズィーエ族，ムッリーエ族がその主流である。これらのクルド族はこの移動に際してオスマン・トルコのスルタンより援助を受け，また土地も提供された。

これらの大きな移動の波は，ユーフラテス川以南に存在していた小部族の間に大きな混乱を引き起こしたわけであるが，また同時にこれらの大部族の圧力に抵抗するために複数の小部族からなる部族連合を組んだ。その代表的なものとして，ベニ・サイードがあるが，この部族連合は三十以上の小部族から成っていた。また，カブール川，バリーフ川周辺にもとからいた小部族のあるものは，ジェイス族，タイ族等の大部族の威を借りるものとして，これら大部族の同族であると称するものもあった。

さらに，ほぼ同じ時期に，エジプトのムハンマド・アリ朝のイブラヒム・パシャがビラード・シャムへの侵攻を行うが（1832－1840），その際にエジプトの半遊牧部族アル・ハナーディがアレッポ東部ジャッブール湖畔やメンベジの東部，アブ・ガルガルに移住させられた。彼らは，ビラード・シャームに侵攻したエジプト軍の兵糧をまかなうために農耕に従事することになったわけである。この時には，上述の地域のみならず，アレッポの周辺にあったいくつかの廃村が復興され，これらエジプト半遊牧部族により再居住されることになった。

これより若干遅れて，チャルカス人（サルキス人）が1873年に，メンベジ，及びカナー

5）北はタウルス山脈，南はサウジアラビアの北，東はチグリス川（ディヤルバクル周辺）に至る，現シリア，レバノン，ヨルダン，パレスチナにわたる地域を言う。

6）主にシリア砂漠をさす。

7）ユーフラテス川左岸，シリア北東部からイラク北西部にかけての地域をさす。

図2　テル・アバルより対岸を望む（水没以前，1990年7月筆者撮影）

セルに強制移住させられる。これは，オスマン・トルコのスルタン，アブドゥル・ハミード二世のとった，遊牧民による町々の襲撃に対する防御対策の一環で，チャルカス人の集落を防御ラインとして利用するものであった。このため，ローマ時代にヒエロポリスとして栄えたメンベジは，この時代に再びその恵まれた水資源を背景に，アブ・ガルガルに次いでこの地域の中心となった。

2　テシュリーン地域の半遊牧民の定住化

以上がシリアおよび，周辺の遊牧，半遊牧部族の動きの概観で，このような背景のもとに，ユーフラテス川上流域の諸部族の定着・定住もなされたわけであるが，マサウディーエ地域以北，現テシュリーン地域に関しては，村落の形成，発展にスルタン，アブドゥル・ハミード二世のこの地への関心が大きく影響している。

スルタン，アブドゥル・ハミードは彼の私有地の拡大を試み，この地での耕地の確保のために積極的に遊牧民・半遊牧民の定住化を図った。この一見困難な事業は，この地域の遊牧部族勢力の弱体化に助けられ，案外スムーズに運んだようである。この地域周辺に存在していた半遊牧部族は常により強力な遊牧部族と接触を保ち，その保護の見返りもしくは保険金としてのクーウェ Khuweh[8] を収めつつ「共存」していたわけであるが，常に略奪の不安があったのは事実で，この状況に疲れ果てていた彼らにとっては，スルタン，アブドゥル・ハミード二世の提案する，彼の庇護の下の定住生活に対する用意があったものと思われる。

定住地はユーフラテス左岸であったが，部族名を以下に挙げると，

8）兄弟関係であることを示す語 akhuwe のベドウィン方言。勢力を持つ遊牧部族が，より劣位の部族または農民から，その保護の見返りとして徴収する税の類。

1）　アメラート　（ブ・シャーバーン：アラブ）

2）　アオン，およびマジャードメ　（ベニ・サイード，もしくはジェイス：アラブ）

3）　シユーク　（タイ：アラブ）

4）　キズィラート　（ピジャン：クルド）

（括弧内は母胎となる部族および民族）

となる。

唯一，テシュリーン地域でユーフラテス右岸，テル・アマルネに村をなす部族にトルクマンのバラク族がある。トルクマンは，セルジューク朝トルコの末裔と言われ，現在シリア国内では北部，バリーク川流域，あるいはセジュール川流域からアザーズにかけての地域に村を営む他，ラタキア東北部からアクラア山までの山岳部にも存在する。テル・アマルネは隣接するセジュール川流域のトルクマン部族との関係が強く，テシュリーン地域へ移動の経緯は上述の各部族とは異なる。周辺の村との通婚関係はあるものの，この地域では最弱小部族であり，目立った政治的な背景もない。

この半遊牧民の定住の過程で注目すべきは，彼らに対する政治的，経済的保護を提供する直接主体の変化である。この時期，在来の地主はチャルカス人，トルコ人，クルド人が主で，彼らが新たに定住した半遊牧民を保護することになるが，このことはすなわち半遊牧民の従来の庇護者である有力なアラブ遊牧部族からの離脱を意味し，実際両者の関係は極めて形式的なものとなる。因みに，在来地主の著名なものとしては，トルコ人では，ムスタファ・スズマン，ジャラール・アクソイ，ヌール・ミルカラム，キズィダ・ハーノム，アリ・ハルドゥン・ムダッレス，サーデク・リファアイ，チャルカス人では，アブドゥル・ラフマン・サイヤーグ，イスマイル・ホジャ，クルド人では，ムーサ・ハーチェム，マフムード・シェイク・ケゼルなどがある。これらの名主は農民たちを完全に掌握，統制していたわけで，この体制は1958年まで続いた。

この定住の波に反して，純粋の遊牧民ベドウィンは，定着を嫌い，バリーフ川流域，ユーフラテス川流域とバーディエの間で従来の遊牧形態を維持した。

Ⅲ　定住した半遊牧部族民

ここでは先に挙げた半遊牧部族に関して聞き込みの成果も交えて，それぞれの特徴について述べてみたい。

1　アメラート族（アラブ）

この部族はブ・シャーバーン族の支族で，ルメイラからサリーンの南部，いわゆるマサウディーエ地区に定着した。前に述べたように，ブ・シャーバーン族はイラク南部から約百年前に移動してきたわけであるが，当初はスィバートと呼ばれる葦とタマリスクで作った家に

住み，天水農耕と牧畜によって生計をたてていた。しかし，後にチャルトと言う単純な装置を使った原初的な灌漑農耕を始める。チャルトとは家畜〔牛〕を動力に一種の水車を使って川の水を汲み上げ農地に導く装置で，装置の使用にあたり，主導権を握った家がいわゆるシェイク，すなわち氏族グループの長となるにいたった。

氏族グループとしては，アル・ハッターブ，アル・ホライエル，アル・ハサン・ダウード，アル・ファウートがあり，それぞれがいくつかの小氏族から構成されている。この中の主要グループは，アル・ハッターブで，アメラート族のシェイクはこのグループより出ている。

アメラートの歴史で興味深いのは，彼らとアネザ族との関係である。周知のように，アネザ族は遊牧部族のなかで最も強大な力を持った部族であるが，このアネザ族はアメラートの拠点であるマサウディーエのすぐ北に野営し常にアメラート族を脅かしていた。アネザ族の著名なシェイク，ハーチェム・イブン・ムヘイドは1920年頃，ハーチェム国家と称する遊牧民国家をイギリスの後押しで建てたわけであるが，このため，隣接する地域に拠を構えるアメラート族の治安は常に安定せず，部族民あるものはアレッポ北部のアザーズやアフリンに移動した。

このように，他部族との闘争の結果，地方小都市に移動，定住するようになった例は半遊牧民の場合極めて多いが，この場合彼等の生業は，農業に間接的に関わり，都市と農村を繋ぐような仕事，たとえば農作物の都市への運送などが主で，また農作物の単純加工等にたずさわる者も少なからずいた。

2 アル・アオン族およびマジャードメ族（アラブ）

アル・アオン族はテシュリーン地域の最も中心的な部族で，ジェイス族の流れを汲むとも言われているが確かな証拠はない。ジェイスはもともとラッカの北部地方を拠点とする最も古い部族であるが，1930年に，アネザ族の移動に伴い北のハッラーンやオルファへ拠点を移さざるをえなくなった。ただこの残党の一部は，ファハル・アル・ハリールの統制下にある小部族の連合体，ベニ・サイードに加わった。ベニ・サイード自体は決してアネザ族等遊牧部族に敵対するものではなかったようであり，このことは，19世紀初頭のファハル・アル・ハリールとルワラ族（アネザ族の一支族）の有名なシェイクであるアッ・ドライアイとの友好関係に関する資料から伺い知れる。この大小部族の衝突，その後の調整を図る動きの中でアル・アオン族はベニ・サイードに加わり，それほど大きな混乱もなくこの地域の最初の定住農民となった。彼らがジェイス族を時に称するのは，ベニ・サイードに入ったジェイス族の残党と彼らとの同一化を根拠としている。

この部族のルーツに関する問題はともかく，定着当時，アル・アオンはユーフラテス川を挟んでかなり広い地域をおおっており，川の左岸のグループはアオン・アル・ジャズィーラ，右岸のグループはアオン・アル・シャーミーエと名付けられた。前者は四氏族からなり，テル・エフェンディからテル・アフマルまでの地域を覆い，後者はジュルン・カビールからカ

ラアト・ヌジュム，マジュラ・フォカーニ，マジュラ・タフターニ地域に拠点を持っていた。また，南部，メンベジ周辺にも一部が存在した。

アル・アオンにはアル・アマラートとアル・ハマド・アル・アリの二つの氏族があるが，両者間には常に闘争が絶えなかったため，後にアル・アマラートは東部のハフサに，アル・ハマド・アル・アリはジェラブルスやアザーズといった小さな町に移り，小作農となった。

マジャードメもやはり，ベニ・サイードに属する，もともとはかなり大きな部族であり，アル・アオンと同様な経緯で定住農民となる。大多数はアザーズやアフリンに拠を構えるが，テシュリーン地域では，テル・アバル周辺を占めるのみで，極めて少数派である。従って，この地域では弱小部族として，一時テル・コムロックのクルド人の経営する農地で小作農として働いていたこともある。

3　シユーク（アラブ）

シリアの最有力遊牧部族であるタイ族の一支族であるシユークは19世紀末にこの地にやってきた。もとはカブール川周辺のジャズィーラに本拠を持っていたが，部族内の抗争の結果，ユーフラテス川流域に移り住む事になった。この地ではヒツジ飼養の半遊牧形態[9]をとり，現シユーク（フォカーニ，タフターニ）を本拠とし，ジェラブルスまでの地域を半遊牧のエリアとした。タイは約500年前，ナジュド砂漠の北辺にある二つの山，アッジャとサルマよりシリアに移るが，その頃はタイ，即ちアラブとまで言われた強大で誇り高き遊牧民（バドゥ）であり，この地で半遊牧部族となった後も，昔ながらのバドゥの誇りをもってふるまい，周囲の部族，特にキゼラート等から，シユーク（シェイク）[10]の名で呼ばれるようになった。

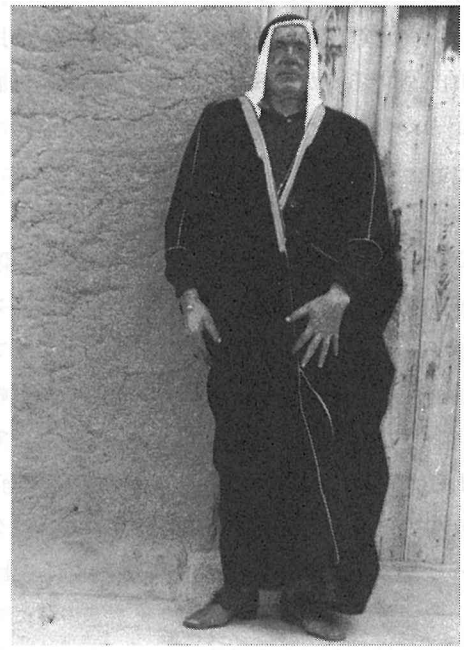


図3　シューク，故ムハンマド・ナイエフ氏
（1978年9月9日の日付が写真裏面にある）

しかし，20世紀初頭，この地域における農地拡張の波の中で，このシユークも大土地所有者，シャバーレクの小作農となる。これは彼らの歴史のなかで，極めて大きな転換で

9）ヒツジ飼養の半遊牧民は通称ガンナーメ ghanname（ghanam：ヒツジ）呼ばれる。ちなみにウシ飼養民はバッガーラ baggara（baqara：ウシ）と呼ばれる。

10）長老，首長を表すシェイク sheikh の複数形。

ある。1958年のバース党政権成立後の農地改革により，彼等は土地を与えられ，小作農から再び土地所有者となるが，これにはそれ以前までこの地域で勢力を持っていたクルド族を押さえ込もうとする新政権の目論見が絡んでいた。

興味深いのは，この頃からシユークとクルドの間の通婚が始まることである。バース党革命以前，この地のクルド族は，アイン・アル・アラブあたりの有力部族のサポートを受けて，他の部族とは一ランク上との意識を持っており，他の弱小部族との通婚を嫌っていたが，新政権下で力を失った彼らは，娘達を新たに勢力を持ったシユークに嫁がせるようになった。またシユークの側からの，かつての「上流階級」への同化願望がこの動きに拍車をかけたようである。

シユークのトップはナイエフ家で，ハウィージェト・ナイエフ（ナイエフの中洲）に住み，マダーフェを構え，後述のディショー家と同様，国会議員を一族から出すなど，当地の名実共の有力者となっている。

シユーク地区はダムによる水没地域に含まれておらず，テシュリーン地域の中心の町として，急速に発展しつつある。ここで，シユークはさらに次の転換，即ち町の住民への転換を経験しているのである。

シユークの歴史は，遊牧民，半遊牧民，農民，さらに都市民へと変容する部族の極めて具体的な例であるが，最後の段階がどのように展開するのか，ダム完成後まだ2年の現段階では計りがたいようである。

4 アル・キゼラート（クルド）

19世紀の末の鉄道敷設以前は，この地域の北に拠を構えていた。母胎はクルド族の中でも一大勢力を持つピジャン族である。スルタン，アブドゥル・ハミード二世の治世にユーフラテス川流域に移動し，ここに従来居たアラブの半遊牧部族，バリヤチを退けた。この部族の長，シェイク・キゼールはオスマン帝国軍のサポートを若干うけつつこの移住を果たし，テル・アフマルからシユーク・タフターニまでの地域において，大土地所有者としての地位を確立した。アイン・アル・アラブの時の有力氏族，ボザーン・ベグ，ムスタファ・シャヒーン，ナフィア・シャヒーン，ガレブ・ベグ（いずれもクルド族）と姻戚関係を持ち，一世を風靡するも，1958年，シリア新政府の土地整理政策に伴い没落する。後，テル・コムロック，ザル・コタック，ボラーズ等の村にて貧農として残るが，彼らがシリア側ユーフラテス川流域に存在する最後のクルド族となった。

蛇足ではあるが，キゼラートの娘たちはその容姿端麗なことで知られており，この地域で美しい女性を形容するとき，「キゼラーティーエ（キゼラートの女性）のような」と言い方をすることもあるほどである。さきの項で触れたように，バース党革命以降のシユークとの通婚開始は政治的，社会的な意味合いの強いものであったが，キゼラートの麗しい乙女をめとることに対して，一種の憧れがあったことも確かなようである。

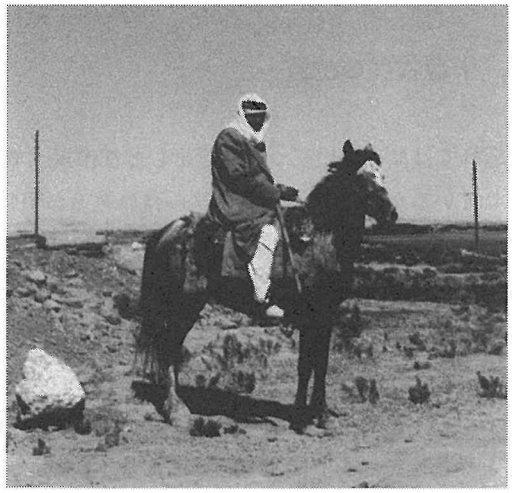


図4　アル・キゼラート，故ムジュハーン氏
（1990年6月筆者撮影）

ダム完成後，代替地のあるメンベジに移った住民も若干はいるものの，かなりの氏族がシリア北東部のカミシュリ等クルド人社会のある町，地域へ移住したようである。

さきのマジャードメの項で触れたように，テル・コムロックの土地を所有するクルド族はテル・アバルのアラブを小作人として持っていたこともあり，両村の関係は婚姻関係等常に深いものがあった。

5　ディショーの中洲

セジュール川がユーフラテス川に注ぐあたりに，ハウィージェト・ディショー（ディショーの中洲）と呼ばれる中州がある。この中州の面積はもともと50 haほどであったが，1990年代初頭の段階では，ユーフラテス川の水位の低下により，およそ300 haに増えていた。ディショーと言う名はここに20世紀初頭に住み始めた一族の名前から来ている。

ディショー一族はもともとアイン・アル・アラブ付近のクルド，ピジャン族のオスマン朝統治下の村に住んでいたが，その後この中洲に移住，周辺の住民との婚姻によりこの地に根を下ろした。

この一族の物語は，時に血なまぐさく，近隣の村，例えば，テル・アバルやコロク・ムガール（スレサート）の住民やキゼラートの一部と，水位の低下により広がった中州の所有権をめぐって常に抗争が絶えなかった。ただ，彼らはバース党革命以前，アレッポの大土地所有者であり大臣であったアフマド・リファアイによりサポートされていたようで，これらの争いは常に彼らにとって有利に解決したようである。

ディショー一族のなかで，1991年に死亡したユーセフは最も多くの土地を持っていたが，9人の息子の教育に力を入れ，その内の一人，マフムードは医師となった。一族は，彼らの勢力を保つために政治に興味を示し，やはりユーセフの息子であるアフマドは国会議員となるなど，常に政治家と深いつながりをもっていた。しかし，ダム湖は彼らの中洲を奪い，一族はメンベジの町に移ったが，かつての勢力は失われた。

ディショーは上述のように，クルド系で，もと半遊牧民であったわけであるが，機を見るに聡い彼らは時にアラブを称するなど，その時々の有力勢力に迎合した。

Ⅳ 遊牧民，半遊牧民の位置

ガウベは，「シリアの歴史を考える上で忘れてはならない三つの要素として都市民，農民そして遊牧民がある。」[Gaube 1982] としているが，これら三者の絡み合いを追わずしてはシリアの歴史の有機的な把握は不可能である。

遊牧と言う生業形態は，農耕社会が成立する以前の単純な牧畜形態の一つと捉えられたこともあり，歴史理解の上での様々な誤解を生んできた。こういった向きに対してレンフルーの「遊牧の牧畜経済は常に農業との共存を必要とする。牧畜遊牧民は植物栽培を行わない（とは言え，実際彼らはかなりよくそれを行っているが）が，彼らは確かにパンや他の植物性製品を必要としているし，それらの食品と動物性製品を交換するわけである。初期の考古学においては，遊牧民とは狩猟，採集民と定住農民の間の中間的な存在であるとされていた。しかし，いまやもうこの考えは承認しがたい。牧畜，遊牧〔形態〕は農耕の成功裡の発展に伴って発現した二次的な発展である。一般に遊牧牧畜経済は農業共同体の共生物である。」[Renfrew 1987: 138] と言う考えは，原初段階における遊牧民と農耕民の関係の一面を単純ではあるが明確に言い表している。ただここでは，この「遊牧」が具体的にどういうものであるかには触れておらず，また半遊牧形態に関する言及はない。半遊牧形態が農耕社会の成立期にどのような位置を占めていたか，まだ不明な点が多いが，筆者は「遊牧」に先行し，基本的に異なる枠組みの中で存在したと考える。半遊牧の起源等の問題はさておき，ここでは文献に現れる遊牧民について簡単に見てみたい。

遊牧民の存在はすでに紀元前の楔形文書の中に見出されており[11]，彼らとの関係の調整のためにいかに国家が手を尽くしていたかが読み取れる。即ち，これら遊牧民は単なる素朴な移動牧畜民ではなく，時には遊牧民の国家を成すまでに強固な政治的，経済的，そして軍事的基盤を持つ集団として存在していたのである。そこには，馬，あるいはラクダの飼養，騎乗の導入等が重要な要素として絡む。

さらに，強大な領域国家が成立するにおよんでも，遊牧民は常にその存在を誇示し，バーディエの縁辺の農村を脅かしたり，さらには都市そのものを襲撃することはままあったわけであるが，逆に国家が彼らの軍事力を利用したり，また機動力，輸送力を利用して遠隔地貿易の一端を担わせたりもした。この「利用」がかえって遊牧民に，より効率的な利益をもたらし，結果として時に都市，領域国家をもゆるがす力を与えたことは，数々の文献を通じて，あるいはつい数十年前の事実として知られている。その攻撃的な面を捉えて，遊牧民は野蛮

---

11) 楔形文字資料に現われる遊牧民の例としては，ナラム・シンの文書に現われるマルトゥのほか，アモリ人（ベニ・ヤミーナ，ベニ・シャムアル……），アラム人（ストゥ，アフラムー……）等々数多い。

な破壊者，あるいは「文明」の対極にあるもののように理解される事もあったが，最近ではこの一面的な見方を修正する向きが増えている。遊牧民の歴史の中での位置付けの再確認が必要となってきたわけである。遊牧民は果てしもない砂漠に他と隔絶されて存在する野盗集団ではなく，常に中央勢力と密接な関わりを持つ機動勢力であり，その長は極めて計算高く，利を得る為の行動を企画していた。彼らは，行動範囲は広いものの，国家としての形態をとらない変幻自在な集団であることを利用し，また逆にそれを国家に利用されながら存続して来た。国家による遊牧部族の利用の例は古くはマリ文書のシャムシ・ハダドの書簡にすでにあらわれている[12]他，パルミラの東西交易における遊牧部族の導入，ウマイヤ朝によるタガレブ族とカイス族の利用[13]，新しい例では，イギリスの対オスマン帝国対策のためのベドウィン利用と枚挙に暇がない[14]。

本稿では，遊牧部族の動きとそれに呼応する半遊牧部族の動きを垣間見たに過ぎないが，彼らの移動は単に牧草を追うためだけではなく，周辺の政治的，経済的あるいは宗教的な動きに対応するものであることは，今回対象とした，限られた地域，時期においてすら明白である。半遊牧部族が定着農民になる過程において，その保護母胎を旧来の遊牧部族にではなく，時の有力者に求めたことは，当時の部族社会にとっての一大変換だったと言えるが，さらにダムによる農地水没後，各地に離散した部族がもとの部族を称しつつも，実際的な部族としての結合を失いつつある現在，次の大きな変化が始まったようである。シリア国民議会の議員になっている部族長も多数存在するものの，さらに近代化を推し進めるシリアの中で，部族社会がどのような形で存続していくかは極めて興味深い問題である。

参考文献

Ayyash, A. (1989) *Hadarat Wadi Furat–Mudun Fratiyye* (ユーフラテス渓谷の文明，ユーフラテス河岸の町). Damascus.

del Olmo Lete, G & J.–L. Montereo Fenollós (eds.) (1999) *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates, the Tishrin Dam Area.* Proceedings of the International Symposium held at Barcelona, January 28th – 30th 1998. Barcelona.

Dossin, G. (1946) *Archives Royales de Mari I, Textes Cuneiformes Tome XXII.* Paris.

Foster, B. R. (1990) Naram–Sin in Martu and Magan. *Annual Review of the Royal Inscription of Mesopotamia Project vol.* 8. Toronto.

12) マリ文書のシャムシ・ハダド書簡に，ヤスマフ・アッドゥと遊牧部族長の娘との政略結婚に関する部分が見られる。

13) ウマイヤ朝は，対ビザンチン帝国用にムスリムの部族カイスと，クリスチャンの部族ベニ・タガレブを巧妙に操った。

14) イギリスが対オスマン帝国のために，アネザ，フエタート，マワーリ等の遊牧諸部族を利用したことは，周知の事実である。

Gaube, H. (1982) Suriya-Multaqa al-Shuub wa al-Hadarat, al-Badu wa al-Fallahun (シリア, 人と文明の出会い, ベドウィンと農民). *al-Athar al-Suriya* (シリアの考古学, Land des Baal のアラビア語版). Mainz am Rhein.

Norman, N. Lewis (1987) *Nomads and settlers in Syria and Jordan,* 1800 - 1980. Cambridge.

Pitard, W. T. (1996) An Historical Overview of Pastoral Nomadism in the Central Euphrates Valley. In : *"Go to the Land /I Will Show You" Studies in Honor of Dwight W. Young. Coleson, J. E & Matthews, V. H.* (*ed.*) U. S. A.

Renfrew, C. (1987) *Archaeology and Language. The Puzzle of Indo-European Origins.* London.

Sanlaville, P. (ed.) (1985) *Holocene settlement in North Syria. Résultats de deux Prospections archéologique effectuées dans la region du nahr Sajour et sur le haut Euphrate syrien* (BAR International Series 238). Oxford.

(株式会社 ざ・エトス文化財修復部)